秀　賞

「わたしに『ちから』をくれたこと」

青森県五所川原市立五所川原第一中学校
一年　小　野　　桜

「あんたは暗いんだから、もっとピシッとしなさい！」

母の声が頭の中に何度も何度も響き続ける。

十一歳。猫背で目が一重な私は、見るからに暗い女の子。見た目だけでなく性格もとことん暗い。人見知りで、人と目を合わせられず、緊張すると、すぐに挙動不審になってしまう。小学校では、どちらかというと浮いている方だった。もちろん暗いせいで、だが。部活動も、運動が苦手であきらめてしまった。

自分から、積極的に話しかけるのも苦手だった。

私には、一つの特技がある。それは絵を描くこと。(暗い人ってだいたい絵が得意なのかなと思った。)特に、オリジナルキャラクターを考えて描くのが大好きだ。小学校では、図工の時間が一番好きだ。

それに対して、私は一番苦手な教科は体育だ。体育の時間になると、私は一気に不安におそわれる。運動が大の苦手で、上手になるために練習している。

このように私は、性格は暗く、物事は続かず、運動が苦手な女子なのだ。

ところで、私の母は、津軽民謡の唄を習っている。私は、唄を歌っているお母さんを尊敬している。すると、

「桜も、津軽民謡のおどり、やってみなさい。」と言ったのである。私は、心の中で、

(ちょっと待って、この運動神経がない、私が⁉)

と叫んだ。私はしぶしぶ、

「うん…。やってみる。」

とは言ったが、内心、不安でたまらなかった。

この出来事が私の心を大きく変えることになる。

翌日、母と私は、おどりを習う教室に行った。そこには、七〇歳くらいの先生と、平均年齢六〇歳くらいの人達がいた。教室に入ったとたん、何歳なの、とか、かわいい、とかをたくさん言われた。若い子は、私しかいないらしい。すると、先生が、

「これからよろしくね、たくさんおどり、覚えて、上手になってね。」

とおっしゃったので、

「は、はい。がんばりますっ。」

と言った。次に生徒さん達がおどりを見せてくれると言う。私は、キレがあり、すばやく動いておどる皆さんに圧倒された。まるで、華やかな花畑で舞う蝶のようだ。私は、こんなふうにおどってみたいと思った。

そして練習が始まった。

まず、じょんから節を覚えるようになった。『しのる』という背を反らす動作をがんばってやってみると、痛かった。それを続けるうちに、猫背に気を付けるようになった。おどるのは、すごくハードだが、とても楽しかった。一カ月もしないうちに、発表会に出ることになった。初めて着物を着て、舞台袖に立つと、一気に緊張した。すると先生に背中を軽くたたかれた。

「出てみたら一瞬だよ、全部出し切って、がんばれ、みんなついてるからね！」

と言ってくれた。

まぶしいライトの中、無事におどり切った。本当に一瞬だった。でも楽しかった。

それから一年、かなりのおどりをおどることができるようになった。

その頃、私は小学校六年生、最高学年として、縦割班の班長をやることになった。不安だが、責任重大。やるしかないと、自分にかつを入れた。

縦割班班長の一番の大仕事の日。おどりで培った勇気と根性で、なんとか皆をまとめ、発表もやり切ることができた。もし、おどりを習っていなかったら、絶対にできなかったと思う。その時、母とおどりの先生にとても感謝した。

あれから一カ月。五大民謡のおどりの中で一番難しいとされる『三下り』に取り組んでいた。身のこなしが難しく、どうしてもうまくおどれないところがあった。何度も注意され、気付いた時には、目から温かい物があふれていた。どうしようもなく悔しくてがまんできなかったのだ。すると先生が、

「泣きたかったら思い切り泣きなさい。でも、自分を信じて、あきらめなければ、きっと大丈夫だよ。」

私は、その言葉が不思議と心に強く残り続けた。そして、私は三下りを覚えることができたのだ。

私は、中学生になり、美術部に入った。がんばることが増え大変だが、あきらめず、明るくがんばりたい。

今までの私ではなく、楽しい中学校生活を歩めるよう、がんばりたい。

作文を書くに当たって

自分でどうしようもなくなやんでいることや、欠けていることがあると思い、自信をなくしてしまっては、何も始まらないことを知り、もし、自分ですごくなやんでいる人がいたら希望を持ち続けて今できることをがんばってほしいと思い「わたしに『ちから』をくれたこと」を書きました。